

Title	古琉球の政治、伊波普猷著
Sub Title	
Author	松本、信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.143(621)- 144(622)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乘
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時南蠻から飛んで來た百姓でもあります。やはり其近郷近國に、古くより神洲の土を耕して居た人です。……海外殖民を雄圖と目する今日に、村が新しいとて卑下すべき理屈はどこにありますやう。……」痛烈な皮肉の抗議を浴びせてゐるのは愉快である。

る叙述とは、郷土研究及び郷土誌編纂に關して多大の注意と獎勵を與へ、つきざる興味をそそるのである。ことに農村問題のやがましき現今において地方行政經濟に意を用ゐる人は、本書によつて研究の根本態度を教へられねばならぬ。村に生れ村に育つたものは、本書によつて村に對する愛着の念をさらに強むるであ

『村を観んとする人の爲めに』においては、相州内郷村を觀察したる経験にもとづいた村落觀察の注意であつて、問題の中心、

(松本芳夫)

繪圖の効用、地名は重要な口碑、準備地圖、其地圖の利用、字と開墾者の生活、宅地移動、地境と領分境と、飛地の歴史上の意味、地下の資料、無ければならぬ工作物の址、僅に殘れる前代の

古琉球の政治

土工 天然記念物の意味等の諸項に分つて、ごまかし、親切な  
そして當を得たる警告を與へられてゐるのは、村の觀察者にとり  
實に尊い指針であつて、それは學識經驗ともに豊富な著者のこと  
き人によつてのみ與ふることのできるものである。

更に『村の種類において』、村の形貌を相するに當つて、個人の

著者は明治廿九年東大言語學科出身の文學士、既に「古琉球」「沖繩女性史」等の著書を以て知られておる。本篇は、沖繩基督教青年會で講演した「古琉球の政教一致を論じて經世家の宗教に對する態度に及ぶ」といふ講演筆記の増補改題したもので、簡明に琉球の神教政治の梗概を述べておる。

力では變更することの難しかつた土着當時の條件に重きを置いて、必ずしも年代にも地理にも依らずに分類し、第一に新田百姓の村、第二に草分百姓（隱田百姓）の村、第三に根小屋百姓の村、第四に門前百姓の村、第五に名田百姓の村、第六に斑田百姓の村となしてゐることも特色あるものである。また『農に關する土俗』において、簡単ではあるが田植の儀式について暗示された問題のことき民俗研究にとつて興味津々たるものである。

わづか百四十四頁の小冊子ではあるが、該博なる智識と巧妙な

琉球民族は日本民族の一支族であるが、或時代にかの群島に移住し、爾來日本本國と交通阻隔され加ふるに活動舞臺の狹少なり。したま、文化の發達は極めて緩漫であつた。西暦十四世紀の初頭沖繩本島の民族はほど三つの團體に分れてゐた。之を尙巴志武力によつて統一し、ついで尙家の尙眞王に至つて制度文物を完成し中央集權の實を擧げたのである。王は即ち尙家の氏神を民族共同の神として崇拜せしめ、未婚王女をその齊の君となし、之を聞得大君と名づけ、首里に永住せしめたる按司即ち大名たちに對して

は、王府に祖先の墳墓の遙拝所を造らしめ、其神官として大アムシラレと云ふ女子を任命した。此大アムシラレが、大勢のノロクモイ即ち地方の女の神官を支配し、政治上かなり重要な位地を占めてゐた。此等の人爲的に出來上つた神官の下に更に自然的に成立した根人なるものあり、之は根神即ち氏神に仕へる神官であり、支那古代に於て祭祀のある毎に設くる戸に相當する。その他に口寄を職業とするユタなる巫祝があり、政治上に多大の勢力を振ひ、時の爲政者を懾ましたのである。

然しかる民族的宗教は、儒教の影響、島津氏の入冠に伴ひ、次第にその勢力を減じ、遂には政治上の閑外に放逐せられ、もつて明治維新に及んだ。

著者は以上の事實を内地人の得難い豊富な史料に立脚して説明しておる。琉球の歴史に關する自分は、之に對しとやかくの批評を下し得ぬが思ふに比較的近世まで古代日本と共通なる原始文化が保有した琉球人の歴史は、古代日本人の文化史を文献以外の材料から闡明しやうといふ者に多大の裨益を與へてくれるものであらう。願はくば本書を魁として將來眞摯なる琉球研究の書の續々現れて我國古代史の上に光明を與へることを希望して止まぬ者である。(松本信廣)

價值、原著者の人物、譯者適否の資格等に就いては、譯者の學界讀書界の先達にして尊敬する友人早稻田大學教授杉森孝次郎君に卷頭へ述べ貰ふことにした。杉森君の保證で讀者に薦めやうと云ふ考へである、と。

### 社會學 (マツキイバア著)

(井上吉次郎譯)

本書は『大阪毎日』の井上吉次郎氏が、トロント大學のマツキイヴァ教授の Community を譯したものだ。譯者は曰く、原書の

體としての社會に於ける國家の位置は、氏の著に於て新に問題とされ、そして新に据えなほされた觀がある』とか、氏の著には思想がある。研究と考索がある』とか、『氏の精神は正しい、それは創造的だからだ、建設的だからだ、完成的だからだ』とか云ふのは、推薦理由としては、殆んど無意味である。何となれば、是等の抽象句は、戰爭前後のどんな政治書にも、殆ど其儘に適用ができるからだ。杉森氏は、本書の性質が何であり、其の中心思想が何處に在るかの事實問題に觸れて居らず、其の長短得失を自分量の秤にさへかけて居ない。——そこで小生は、推薦とは別の理由を以て、本書の内容を略評に試みる。

本書は原序の譯を忘つたが、それに據ると、著者は、曾て社會學の成立を疑ふた人である。其の初期の論文は、經濟學と政治學の外に獨立のできる社會學はないと云ふ意見を發表したものだ